

社長所感（9月）

『吾輩は猫である』などの小説で有名な夏目漱石が、第五高等学校の英語教師をしていたときの話です。

生徒から「probability（蓋然性）と possibility（可能性）の違いがよく分からないのですが---その違いを具体的に教えてください。」との質問を受けて、「私が、ここで逆立ちをするようなものだ。逆立ちすることはできるので、possibility（可能性）はあるが、教師が生徒の前で、そんな恰好はしないので、probability（蓋然性）はないということだ。」と説明したという有名な話があります。

明治の昔、今では考えられないくらいに教師は偉く、生徒の前でおどけて見せるようなことはありえなかったという時代背景があります。

もっとも、漱石自体、『坊ちゃん』などの小説を見ても分かるように、ユーモア精神に富み、友人の正岡子規や弟子の寺田虎彦（「災害は忘れた頃にやって来る。」の警句で有名な地球物理学者）の前では、おどけた一面も見せていたようです。

probability と possibility と同様に、差異が分かりにくいものに、government（ガバメント）と governance（ガバナンス）があります

government（ガバメント）は、統治ということで、Local Government（地方政府）、governor（知事）など比較的古くから使われ、なじみの深い用語であるのに対し、governance（ガバナンス）は、比較的新しく、1990年代頃から注目された用語で、「発展途上国をいくら支援しても効果が出ない、それは、その国の governance（ガバナンス）が悪いからだ。」という風に使われてきました。

こうした経緯から、発展途上国の政府のガバナンスの良し悪しを判定する要素として

- （1）汚職の度合い（汚職が多いと、役人の懐は潤っても、国民に還元されない）
- （2）独裁、密室政治の度合い（独裁者やボスが潤っても、国民に還元されない）
- （3）行政の非効率性の度合い

などが物差しとされているようです。

それでもなお、もう一つピンと来ない点もあり---。どこかに夏目漱石のように、具体的に分かりやすく説明してくれる人がいないものかと思う昨今です。

とはいえ、東芝、三菱自動車などの不祥事で、企業ガバナンスの必要性が叫ばれ、イトーヨーカドーの社長交代劇で、社外取締役が機能すると、ガバナンスが成功したと称されるなど、ガバナンスという言葉自体すっかり市民権を得たものとなっています。

そこで、弊社でも、ガバナンスの一環として、保険業法の改正に併せ『保険募集管理体制について』という社内規則を作成いたしました。

お客様へのサービス向上のため、社員の資質の向上を図るとともに、業務について自己点検し、必要があれば改善を図るという PDCA（Plan-Do-Check-Act）サイクルを構築していこうというものです。 よろしく願いいたします。